

ショーロはブラジルポピュラー音楽研究をいかに更新しうるか：
サンパウロ、レシーフェ、リオ・デ・ジャネイロにおけるフィールド調査にもとづいて

鈴木岳志（東京外国語大学大学院博士後期課程）

ブラジル音楽ショーロChoroは19世紀のリオ・デ・ジャネイロに「起源」を持つとされるインストルメンタル音楽である。本発表では2025年8～9月にかけて行った同音楽に関するブラジルにおけるフィールド調査の成果を踏まえ、いかにしてショーロがブラジルポピュラー音楽研究の議論を深める事例となり得るかを検討する。

ショーロはマスメディアを通じてブラジル全土に広まった経緯を持つが、近年の言説においては音楽家同士の寄り合い的な実践「ホーダ・ヂ・ショーロ（ショーロの輪）」によって十九世紀から続く口頭伝承の文化として語られている。発表者は、修士論文にて、こうした言説は

1990年代に広く普及したものであることを明らかにし、それを「ホーダ史観」と名付けた。こうした研究成果を踏まえ、本調査ではホーダ史観に還元されないショーロを巡る学術的な論点を探ることを目的にサンパウロ、レシーフェ、リオ・デ・ジャネイロという三つの地域のショーロ実践に対して参与観察を行った。

これまでのショーロ研究においてホーダ・ヂ・ショーロは中心的な研究対象となっており、フィールド調査に基づく研究が蓄積され、実践の場において共有される理念やマナー、演奏技術の学習方法が明らかにされてきた。こうした中、同実践を語るにあたってとりわけ注目されてきたのはインフォーマリズムの重要性である。ホーダ・ヂ・ショーロはフォーマルな教育や金銭のやり取りを前提とする活動からは区別され、人々の親密圏における秩序の中で行われるものとして受容されている。

しかし、先行研究はインフォーマリズムの理念が排除する要素を見逃し、ショーロを広い文脈に位置付けることを怠ってきたために、現在のショーロシーンの豊かな実践を矮小化している。ショーロ研究が見逃してきたのは以下の三点である。第一に、ホーダ史観はショーロの起源を19世紀のリオにおける下層階級の人々に求めるが、現在ショーロが活発に行われているのは主に中間～富裕層の地域である。第二にホーダ・ヂ・ショーロをはじめとするショーロの実践において中心的な役割を担っているのはプロフェッショナルな音楽家たちである。第三に、ショーロは1990年代以降ブラジルの学术界においても居場所を徐々に確立しており、音楽院、音楽大学はたくさんの優れたショーロ演奏家を輩出している。現代においてショーロは中間層の音楽市場とフォーマルな教育とともに、インフォーマリズムの理念を保ちながら、他ジャンルと有機的に接合し、新たなオーディエンスと社会的な位置を手に入れていると考えられる。ショーロという事例は、こうした現代的な文脈を踏まえることで、ジャンル別にではなく、ブラジルポピュラー音楽全体をめぐる社会的な動向を検討する論点を提供することができる。